

シェークスピアと東洋Ⅱ 青江舜二郎

2. ロミオとジュリエット

毒をもちいて仮死の状態にはいり、一旦埋葬させてから蘇生してそこを脱出して悪人といっしょになるといのが、ジュリエットにさすけた神父ローレンスの秘策であった。

そのことが離れた土地にいたロミオにうまくつたわらなかつたため、あの悲劇が生れたのだが、四世鶴屋南北の脚本に「心謎解色絲」というのがある。本町二丁目糸屋のひとり娘で本町小町とよばれたうつくしい娘のお房が、佐五兵衛というわる番頭とぐるになつた悪い医者の東庵に婚禮の酒に毒を盛られて死に、棺桶に入れられて墓地にはこぼれる。そこで解毒剤（それが何と雨水）をつかつて蘇生させ、命を助けた恩人ということで糸屋に乗りこんで婿となり、娘と財産を手に入れようというのが彼らの計画であつた。ところが彼らの

内しよ話を開にした本庄綱五郎という浪人が、墓地に先きまわりしてお房を救い出す。おりから雷雨がやって来てお房は生き返り、見れば自分を助けてくれた男は、いつも夕方から彼女の家の軒下で占い商売をやるりりしい浪人ではないか。お房はこの綱五郎恋しさに、どんな縁談も耳にはいらなないのであつた。そこへ佐五兵衛と東庵がやって来て綱五郎にやつけられ、とうとうお房は綱五郎とめでたく夫婦になるという筋立てだ。この、「毒による仮死」その他が「ロミオとジュリエット」に似ているといので、南北が、そのシチュエーションをとり入れたという説が出て来た。（伊原青々園「日本における沙翁劇」同上雑誌、本間久雄「大南北と、ロミオとジュリエット」——「沙翁復興」第二号）

それではどんな経路で、南北は「ロミオとジュリエット」
（あるいはこの物語）を知つたか。——青々園によれば、当

時はもちろん鎖国政策がつずいていて白人国家との交通は杜絶していたがオランダだけは例外で、長崎には彼らが居留する出島があった。そこに蘭法医学通じて外国文化を摂取しようという若い俊秀が各地からあつまつた。そこでこの有名な戯曲の話が自然彼ら青年の耳にはいることになり、——あるいは、蘭人たちが何かの催しにこの劇を演じることがもあつたのではないか。——江戸へ帰つてその話をする。それが南北の材料になつたというのだ。この説明は一応筋は通つていゝるがどうも私には信じられない。第一、多くのシェークスピア文獻によれば彼は彼の頃それほどまだ外国には知られていなかった。第二、ほんやく劇を自分の国のしばいよりもあつたがたがるのはほとんど日本だけの現象で、ほかでは大体どの国でも自分の国の作家のものを重んじる。だからその頃日本へ来ていたきわめて少数のオランダ人たちが、ほんやく劇をやつたということは到底考えられない。現に私たちが学生だつた頃、外人が東京や横浜で上演したしばいだつて全部、彼らの国の作品だつたのである。

それでは南北はどこから「毒による仮死」を思いついたの
だらう。

それを知るとは今の私にはほとんど不可能だ。わずかにシナの古文獻につきのような記録がある。一つは宋の時代に出世に出た「異聞総録」で、それによれば、宋の大猷年中に歌

愚という役人が妾を買つた。ところが妾には情人がいたのでたがいに示し合わせ、毒をもちいて女は仮死の状態になつて埋葬され、後、男がそれを掘りおこしてかけ落ちさせた話が収められている。もう一つは清朝初期に出た「閨薇草堂筆記」で、閨中の町にある娘がいた。許婚の男といよいよ結婚しなければならなくなつたが、恋人がいたので茉莉花の根をすつて酒に入れて飲み仮死の状態にはいり、葉のききめが切れると蘇生して恋人と他郷へ逃げた。それから何年かたつて閨中の人間が旅先で、いかにその娘によく似た女を見かけたので声をかけ、問いただすとどうとうその事を白状し、絶対秘密にしてくれとたのんだという。これらの書籍は日本にも早くからつたわつていた。町の漢学者で南北とこいひだつた人間も何人かいたはずで南北はこの「おんな趣向」を彼らから得たのではなかつたのか。——すくなくともこの推理のほうで、長崎出島説よりも隱当だと私には思われる。シェイクスピアの「シムベリン」には、娘イモーゼンが知らずして毒を飲みそして生きかえるというところがあるが、「おふさ綱五郎」とつながるとすればむしろこの方ではないか。ロミオとジュリエットは親同志の不仲が、二人の添われぬ原因だ。しかし、南北では、思う男がいるのに外の男を婿にしななければならなくなつたので一服盛られるのである。そして蘇生して恋人といっしょになるという筋は、むしろシナの材料

に近い。もしも「ロミオとジュリエット」が南北につたわっていたとすれば、あくどいしくみが大好きな彼のこゝだ。ジュリエットの死を仮死と知らずに墓所にかけてつたロミオが、悲嘆のあまりその死を追って死ぬ。やがて仮死からさめたジュリエットがそれを発見して同じ刃に例れるというところをまるまるちょうだいしなかったはずはないし、親が敵同志というところも南北の気に入つたはずである。そしてそこでお守り袋が臍の緒書が発見され、二人がきょうだいだったことがわかる……となれば、当然南北から黙阿弥へそっくり伝わるはずであった。……

3. ハムレット

デンマークの王子ハムレットの悲劇は、古い時代のデンマーク王朝に実際にあつたことではなかつた。それがどのようにしてシェークスピアの手にかかるようになったのかということはずでに多くの研究によって明らかにされている。

だがしかしその物語の根源はどこだろう。

森鷗外はすでに明治の末期においてほとんど同じ筋のものが「西遊記」にあることを発見し、「烏鷄国太子とハムレット」という随筆を雑誌歌舞伎（明治卅五年五月「歌舞伎」）に書いた。（全集第二〇巻）この説話の類似は果して偶然なりや、またはパンカタン ترام等インド古説話中更にこの

二説の本源たるものあらざるか。好事の人は検討して可なり。」という文章でそれは終っているが、それから半世紀も過ぎてゐるのにこの研究はさっぱり進んでいないようだ。

三蔵法師の一行はある夜宝林寺という寺に泊まると、夜深けて三蔵法師のところに怪しい姿があらわれた。白い装束でびっしり濡れている。烏鷄国の王と名乗り三年前宮庭の井戸に投げこまれたことを語る。下手人は道術をよくする行者で、烏鷄国がひでりになやまされた時、王はその道者に雨を祈ってもらい、しるしが大いであつたので、よるこんだ王は行者を宮中に迎え入れ、義兄弟のちぎりを結んだ。ある日二人で庭を散歩している時、突然王を井戸につき落した行者は、すぐ術をつかつて井戸を埋め芭蕉の木をそこに茂らせ、自分は王の姿になつて王宮にかえる。それ以後彼は太子が母なる妃に近づくことを許さなかつた。——その太子が明日狩をするためにこの附近にやつて来てこの寺で休息する。その時にこの話を太子にして、仇をとるようにつたえてくれ。しかし太子がそれを信じないといけないから、証拠に珠をおいてゆく。……といつて消える。

翌日太子がやつて来る。三蔵は易者に化けて本堂に居り、その手もとの小さな箱には悟空が変身してはいつてゐる。そこで太子と易者との間に話がはじまり、やがて

真相を知った太子はすぐ城中に引きかえし、まっしぐらに母の宮殿に行って母を問いつめる。母なる妃はあの日、庭から帰ってから王のからだが冷たくいいつも変だと思っていたことを打ち明け、三蔵法師一行が宮殿にのりこんで、怪行者と孫悟空の壮絶なる一騎討となり、とうとう怪行者がまける。王は「還魂丹」によって生きかえる。……

これが荒筋だが鵬外はこの二つの物語の血縁性としてづぎの三点をあげている。

1. 兄を暗殺し王位と妃をうばう。
2. 殺された場所が庭であること。
3. 父の亡霊の出現によって太子がそれを知り仇を討つ。

これはたしかにその通りだ。そして私はさらにもう一つ「ハムレット」に出て来る旅役者たちと、同じく旅をしている三蔵法師の一行という類似をこれに加えたい。どちらも「犯罪ばくろ」のために変装し演技し、重大な役目を果している。

一六世紀の作家呉承恩の「西遊記」はもちろんすべてが彼のオリジナルではなかった。すでに七世紀には「唐三蔵取経詩話」が出ており、その頃民間にひろまっていた三蔵の旅行冒険談が骨子となっている。それ以後何種類かの「西遊記」

が書かれたが呉承恩に至ってじっにおもしろいものになった。そしてそれらの主役である孫悟空の祖型としてインドの古典「ラーマーヤナ」で大活躍をする猿王ハヌマンをあげるのが定説だ。そうだとすれば「ラーマーヤナ」の中に「烏鶉国太子」の原型があるかも知れないとは一応考がえられるところだが、そこには私のしらべたかぎりでは見あたらない。しかし前島信次の「玄奘三蔵」には、つぎのような話が紹介されている。

活活の太守タルドウの若い妃は、タルドウの最初の妃が生んだ王子と私通し、タルドウを毒殺して太守の位とその妃をうばった。

高昌王の妹はタルドウの二度目の妃として迎えられたのだが病死し、そのこどもはまだ若い。……これは玄奘がその国に滞在していたころの出来事だとなっている。

烏鶉国のお家騒動と似ているといえは似ているが、味わいの点ではかなりちがうようだ。権力者なる肉親を殺してその地位と妻をうばうというだけのことなら世界諸国の王朝、封建時代にいくつも例があり、古事記にも安康天皇が弟の大日下王を殺してその妻長田大郎を妃とし、その子の目弱王に復讐されたことがしるされてある。したがって「ハムレット」と「烏鶉国太子」物語の血縁性はそのような筋だけでなく、むしろその「道具立て」の類似にあるのでそのことは私の

「しんとく丸考」の中でも強調しておいた。鷗外が指摘したのもやはりそれである。

それではこの「ハムレット」と「烏鷄国王子」という遠くへだつた二つ地域の物語は、どちらが先でどちらがあとなのか、どちらからどちらへどのように変化しながら流れたのか、あるいは鷗外の想像したように、もう一つその「祖型」があるのか。……

坪内博士や小山内薫その他の解説によれば、「ハムレット」はデンマークの古い伝説に材をとったもので、その国の歴史家、サクソ・グラマティクスが書いた「ゲスタ・ダノルム」がいちばん古く、その中にアムレトウス(Amlethus)の復讐談があったという。一五一四年、その書物が出版された。アムレトウスの部分は一五〇七年仏訳され「イストアアル・トラジック」(悲劇史)第五巻におさめられた。英国のトーマス・キッドが書いた「スペインの悲劇」もこれを材料としたものだという。この作品と、シェイクスピアの「ハムレット」と、どこが似ていてどこがちがっているかは、坪内博士の「解題」にくわしく「スペインの悲劇」ではスペインとポルトガルの間にあらずいがあり、副王の嗣子が捕えられるという事、將軍の子ホレーショとスペインの公主ベルイムピリア姫との恋、その仲を姫の兄がさくというようなことがあり、それが「ハムレット」ではデンマークとノルウェイ、ノ

ルウェイ王の甥の謀叛、ハムレットとオフィーリアの恋、それをオフィーリアの兄と父があきらめるといい、そして姫の兄がどちらも姫の恋人の敵となること。また「スペインの悲劇」ではイエロニモ將軍とパチュルドーが子の仇を討とうと手をたぎり「ハムレット」ではハムレットとレアチーズが同じ目的だ心を合わせるなどなどをあげているが、結論としては「原作ハムレットは今もってどんなものやらわからぬ。」とさしをなげたかたちだ。一五八六年、英国の俳優一座がデンマークの王家から招かれ、エルシーノアの宮中で演じたのがシェイクスピアでない「ハムレット」で一五八九年に帰国した。ドイツには一六〇三年にやはり英国の旅役者をもっていったレパートリに「兄殺しの応報」がありそれにはシェイクスピアの作品にも出て来る「劇中劇」がすでに織りこまれていたという。

だが、これだけではどうにもならない。

そこでもう一度「烏鷄国」にかえると、三蔵法師のその後の行程からいってそれはインドよりもかなり東北で、中央アジアの西南に設定された国だというだけの見当がつく。

そのへんにアナウというところがあり、有史以前のある時期にアリア民族が大きな社会を形成していたといわれる。そして何かの事情で彼らが南に移住する時そのルートが分れて一つはインドにはいり、一つはペルシアに一つはギリシア

に入った。ギリシア・ローマの家族宗教及び制度にギリシヤの神々や社会が形成される以前の古いものがあり、それはインドのそれと共通している(クラーンジエ「古代都市」その他)のもそのためだといわれるが、もしそれが事実ならば、烏鷄国太子の伝説は、その頃彼らが共有していたのではなかったか。そこで私の大胆な仮説が生れてくるのだ。すなわちギリシア神話の「オレステース」は「ハムレット」とともに烏鷄国太子のシチュエイションを祖型とするのではないかということ。

呉承恩の「西遊記」には一つの大きな特徴がある。それには、道術や邪悪な術をつかうさまざまな妖怪が出て来て、時には孫悟空でさえかなわない。そしてどうにもならなくなる。とかならず観音菩薩は、もとのすがたにかえった彼らを前に、そうした来歴を語るのだが、その形式はあきらかにジャータカのそれにしたがったものだ。すなわち彼らの現在には、そうなるべき過去の「輪廻」があったのである。烏鷄国太子の物語では、観音でなく文殊菩薩があらわれ、王を殺して国をうばった道士は、文珠がいっも乗っていた青毛の獅子であった。むかし菩薩がこの国をたずねた時、仏教をきらっていた王は、菩薩をしばって三日水につけたことがある。そこで青毛の獅子が、王をこらすために派遣され、道士にすがたを変えて王城に乗りこみ、王を井戸に投げこんで三年間、

水ぜめの苦を与えたのであった。……

このようにどの挿話でも最後に仏陀や菩薩が出現し、その最勝の威徳をしめすのだが、それは必然中国で生れ、中国で発達した道教(老荘思想)を仏教の下位におくことになる。多くの妖怪があやつるのは道教系統の「術」だがそれは、結局仏陀の「正法」の力にはかなわない。――

というのは、呉承恩自体の信仰がどこにあったかということよりも、むしろその時代の思潮を現わすものであった。仏教がシナにはいつてから、これが老荘思想、あるいは儒教と、時に反発し、時に融和し、……というジグザグの経過をたどり、それがそのままその時代に書かれた小説伝奇に反映する。したがって道教優位の作品もずいぶんあるわけだが呉承恩が生きていた頃は、仏教は大いに官民の間に行なわれていたのだ。(くわしくは常盤大定博士「支那仏教思想史」その他を参照せられたい。)

そこでギリシア神話にもどると、トロイヤ戦争でかくかくたる武勲を立てて帰還したアガメムノーン王は、王城にはいると彼を浴場にみちびき入れた妻、クリュタイメストラに殺されてしまう。彼女は王のいとこアイギストスと王不在の間に情交を重ねていたのであった。幼児オレステースは下僕につれられ王城を出奔する。アイギストスは、クリュタイム

メーストラを妃として王位につき、オレステースの姉（あるいは妹）エーレクトラーは、精神に挫折ある「異常児」としてその城に育ち、（あるいは貪しい農夫の妻となり）暗い歳月をすごす。しかし彼女は一日としてアイギストスへの復讐を忘れず、ひたすらオレステースの出現を待ちわびる。時は来た。エーレクトラーは父の墓所でオレステースにめぐりあう。そしてとうとうアイギストスも、クリュタイメーストラも彼らによって殺される。……

だが、この話にはさらに過去がある。アイギストスがアガムメノン殺したのには、アイギストスの父エウリュステースのその兄アトレウス一家に対する深い怨みがあったからであった。それをわが子にはらさせるために、エウリュステースは、自分の娘によってアイギストを生み、彼にアガムメノン殺しの呪いをそそぎこんだのだ。一方クリュタイメーストラは、彼女の長女イーピゲネアを、トロイア遠征出陣の折、神に勝利を祈る人身御供として、彼女の悲嘆をかえり見ずつれ去ったということでアガムメノンを深く怨み憎んでいる。しかもその夫は、プリアモスの王女カツサンドラーを捕虜とし、その美貌にまよわされて正体もないというもっぱらの噂であった。アイギストスと情を通じるようになった気持には、このような「自己弁護」——因縁が、彼女の側にもあったのだ。

こうしてアガムメノンは殺され、アイギストスとクリュタイメーストラは、オレステースによって殺される。しかし事件はこれで終わったわけではない。血族を殺したという罪のためオレステースは復讐の女神エリーニュエスにとりつかれ狂乱して諸国をまわりながら北方のスキタイをおとずれ、そこでアルテミスの女神に巫女として奉仕していたイーピゲネアにめぐりあう。スキタイはタウロイ人の住む国で、異国人はすべてこれをいけにえとしてアルテミスにささげる掟があった。オレステースも当然そうされなければならない運命だ。しかしイーピゲネアは策をめぐらして兄を船で脱出させる。あらしが起る。国王の船が追いかけて来る。とうとうオレステースが捕えられそうになった時、上空に女神アテーナイがあらわれて彼を救う。……

今日残っているギリシア神話には、ギリシア以外のいろいろな要素が混在していることはあらためていうまでもない。それらの中で、私は、ジャータカ的な、あるいはもつと古いインド的輪廻観念、そしてその上に一つの物語の筋が組み立てられているものがいくつもあることに強く惹かれるのだ。いかにもギリシアらしく、澄明単純にさっくりまとまっているのももちろん随分あるが、めんめんと「因縁」がつづられているものもある。オレステースの復讐談もまさにその一つとっていいだろう。しかもオレステースの行動を大きく

動かす神アポロは誰も知ることく小アジアに生れたものであり、狂乱の後、最後にオレステースがたずねるタウロイ人の国は、いまのクリミア半島だといわれている。イーピゲネイアは、そこで巫女としての生活を送っているのであった。そしてこれらの事は、私にオレステース説話はじつはギリシアでなく、中央アジアのどこかで烏鷄国太子の物語と胎を一つにしていたのではないかと想像させるのだ。烏鷄国王は井戸にほうりこまれ、アガメムノーンは浴室で殺される。オレステースの行動にはたえず神話がのしかかる。これは烏鷄国太子やハムレットが亡霊によって父の非業の死を知ることと無縁ではないだろう。——と見てくれば、鷗外があげた三つの条件はそれほどこのこじつけでなくこの三つの説話に共通しているのではないか。オレステースには、ピュラデースという親友がいて、たえず彼と行動を共にし、あらゆる献身をおしまない。しかも彼はもともとエーレクトラーの許婚でもあったといわれるが、この三人の関係が「ハムレット」における、ハムレット、オフィーリア、その兄にたいしてハムレットの親友であるレヤアチーズのそれにたやすく置きかえられることは誰も気がつくだろう。アレキサンダー大王のインド侵入を契機として「ギリシア」がインドにはいったという「歴史」のはるか以前に、ジャータカの思考と説話がギリシアにも流れていたということを否定する証拠は見あたらずま

た、ギリシアとインドが中央アジアのどこかでその生活と神々を共有していた時代があったこと、したがってインドにギリシアがはいり、あるいはギリシャにインドがはいったというだけのところで考えても解決がつかない事象のあるものは、その中央アジア時代を中心に考えて見るということも必要ではないかということを私はここでいっておきたいのである。